

レースっていいよね

第23回 「男であること、女であること」の巻

まず最初に誤解の無いようにしておかなければならない。私は意味も無い男女差別はしない。女性で尊敬する人もいるし、どちらの優劣などを語ろうというのではないと言う事をだ。

さて、「人間」という定義の前では性別など問題ではないが、「男」と「女」は生物学上も別個のものであるし、それらの特徴として肉体の差があったりというのは小学校の性教育でも習うことだ。最近は何事にもユニセックス化が進んでいる、ボーダレス社会というか、過去に「男らしい、女らしい」とされてきた価値観などはうとましく感じる時代になってしまったのかもしれない。ちなみに、アメリカという国は既にそういう認識は非常に高く、それはそれで確かに本当に「自由」なのかも知れない。

しかし、である。人間としての「自由」は平等であるべきだけど、私は「らしさ」というのをもっと大切にしたいほうが良いような気がするのだ。

例えば、「女らしい」女性はとても素敵だし、野暮な話としては、スカートが最も似合うのは美的にもやはり女性だと思うのだ。あの流線型、というか何とも言えない曲線美は芸術的と言ってイイ。勿論それらの「らしさ」を維持するためには相当な努力や苦労もあるだろう。その切磋琢磨具合がまた素敵ではないか。

しかしレースクイーンなどは極端ではあるし、彼女達はいわゆるサラブレッドのような人達で、普通の人があたる必要は無い。・・・もしそうだと日本は凄い事になるな。ちょっと見てみたい気がするけど・・・

さておき、肉体の特徴を追求するばかりではなくて、言葉遣いや立ち振る舞いなど、それらを少し意識するだけで随分「らしさ」を演出できると思う。

やっぱり女の子が股をおっ広げて電車に乗ってるのとか、デリカシーの無い言葉遣いを目にする度、かなり幻滅することがある。せっかく女の子なのに、と。

女性について書いたけど、これらは当然男についても同じことだ。まあ、自分のことを棚に上げて、という御指摘を受けそうだが。

ところで、日本のレースの世界は結構まだ古臭い体質かもしれない。

誤解を恐れずに書くなら、他のどんな職業がボーダレス化によって改革があらうと、レース業だけはいつまでも男のロマンであって欲しい。

別に女性がレーサーを目指したり、メカニックやエンジニアになったりするの自由だし、本人が望むのなら存分に挑戦して結構。ただ、「心意気」というものはいつまでも「男らしく」在り続けてもらいたいな、と。

「男のロマン」などという言葉はもはや陳腐、過去の遺物となりつつあるけど、「らしさ」が失われつつある現代においてまさに守るべき最後の砦。

とは言うものの、女性は男性に比べ現実的とされる中、オモチャに囲まれたような世界で、やれ速いだの遅いだの、カッコイイだのにいい大人が真剣になってるようなのって、そもそも理解され難いかもしれない。

モータースポーツ先進国イギリスでも、そして男女平等に対し異常に執着するアメリカでさえ、レース業に携わる女性は男性に比べればその絶対数はやっぱり少ないから、男のロマンはどうやら世界共通なのかなあ。